

若い日本人女性のピッチ変化に見る文化的規範の影響

今 井 田 亜 弓

0. はじめに

男性と女性の言語行動には、音韻 (Poynton 1989)、語彙・文法 (Holms 1992)、談話 (Fishman 1983) など様々なレベルにおいて差異がある。男性と女性の言語使用における差異のほとんどは、生まれながらにして決定される性 sex の違いによるものではなく、社会文化的な役割としての性 gender の違いによるものであることが社会言語学者によって指摘されてきた (Zimmerman & West 1975、Fishman 1983、Holms 1992)。

社会文化的な要因¹が引き起こす男女間の言語使用の違いとしては、丁寧さの度合い (Holmes 1995、鈴木 1999)、標準形の使用の頻度 (Nichols 1983、Eckert 1989) が挙げられる。一方生物学的な要因が原因とされるものに、男女の音声面、発声面における違いが挙げられる。たとえばピッチの高低²には、声帯の長さが最も重要な要因であるといわれる。平均的に男性は喉頭が大きいので、喉頭に内蔵される声帯も長い。長い声帯は短い声帯に比べゆっくり振動するため基本周波数が低くピッチが低くなる。逆に女性の声帯は短いので速く振動し、ピッチは高くなるといわれている。³このような声の高低が与える印象として、欧米では音程の高い声は「子供っぽい」、「未熟だ」、「精神的に不安定」などと否定的な印象を与えることがある。しかしこのような音声表現は、文化によって異なる意味づけがなされる。たとえば日本では、高い声は「女性らしい」とか「丁寧である」など肯定的に解釈されることが多い。⁴

1. 研究の目的

声のピッチに関しては、Loveday 1981、Tsuge, Kakami, & Fukaya 1987、Terasawa, Kakita, & Hirano 1984、Ohara 1992、van Bezooijen 1995 などの研究があるが、Yamazawa and Hollien (1992) は、3つの異なる研究結果 (Hanley & Snidecor 1967、Tsuge, Kakami, & Fukaya 1987、Terasawa, Kakita, & Hirano 1984) における日本人女性の声のピッチと American English women の声のピッチ (Fitch & Holbrook 1970、Hanley & Snidecor 1967、Hollien, Tolhurst, & McGlone 1982、Stoicheff 1981) を比較し、若い日本人女性はコーカサス人 (American, Northern and Western European,

Australian) よりピッチが高いとされるが、⁵これは日本語がピッチアクセント言語であるのに対し、米語はストレスアクセント言語であり、言語の構造の違いに起因すると述べている (1992: 134ff.)。

Loveday (1981) では、日本人、アメリカ人男性各3名、女性2名を被験者として politeness formulae に関して日本語と英語のピッチを測定したところ、日本人女性は日本人男性と比較して明らかに高いピッチを用いたのに対し、⁶アメリカ人の男女間ではピッチの差は非常に小さく、異文化間において性差によるピッチの違いが観察された。

また日本人男女を被験者として日本語と英語による発話のピッチを比較した研究 (Ohara 1992、大原 1993) では、大学生男女各6名⁷を対象に英文、日本文各10文を読ませ基本周波数を測定したところ、女性被験者全員の日本語の平均基本周波数の平均値が最高値と最低値ともに英語より高く、両言語間の最高値の差は29Hzと大きかった。これに対して男性被験者においては、最高値、最低値ともに日本語と英語における差異が観察されず、女性だけが日本語を話すときに英語よりかなり高いピッチを使っていることが明らかとなった。このような異言語間におけるピッチの違いは、身体的構造や言語の構造に起因するのではなく、むしろ声の質や、声から受けるイメージに社会的要素が深く関わっているとして大原 (1997) は、基本周波数の高さが異なる声を録音し、与える印象について調査を行った。日本語を第1言語とする女性2名が、異なる平均基本周波数で発話した挨拶文⁸について、日本人男女19名⁹の被験者に声の印象を評価させたところ、男性、女性被験者ともに、基本周波数が高くなるほど「かわいらしさ」「柔らかさ」「やさしさ」「親切さ」「おとなしさ」「上品さ」「丁寧さ」「きれいさ」についての印象が強くなり、また反対に「頑固」「わがまま」「強さ」のイメージが弱くなるという結果が示された (1997: 47ff.)。

同様に van Bezooijen (1995) でも、日本人とオランダ人の声のピッチを社会文化的アスペクトに基づいて比較研究した結果、¹⁰女性に期待されている声の高さは日本人、オランダ人では異なっており、日本文化は女性に高いピッチの使用を優先するが、オランダ文化は低い声を優先することが明らかになっている。¹¹そして short, weak, dependent, modest によって表現される身体的、心理的な“powerlessness”と高いピッチの関連性を指摘し、¹²より高いピッチが社会から望ましいとされる場合に、多くの女性はより“powerlessness” (smaller weaker, more indirect, more modest) に聞こえるようにピッチを高くし、それによって社会的に望まれるイメージをつくらうとしているのだと分析している。¹³これは女性にとって高い声を用いることが望ましいとする「ジェンダー・イデオロギー」の影響を受けていることを意味している (Ohara 1992、Okamoto 2004)。¹⁴

一方、文末表現や敬語など言語形式に関する女性の言語使用における調査では、若い

世代におけることばの「中性化」が指摘されている。年齢の異なる3つの集団の文末形を分析した Okamoto & Sato (1992) では、年齢が高いほど「女らしい」形態が用いられており、若い女性においては女性のステレオタイプとして挙げられる文末形¹⁵は少なく、主に男性に多く観察される文末形¹⁶が頻繁に観察された。また18歳から20歳の女子大学生を対象に親しい間柄における会話を分析した Okamoto (1995) も、若い女子大学生が「女ことば」の文末形をほとんど使用しない(12.3%)と述べている。

高校生や若い女性のことばに対する意識や言語形式の使用実態を、彼らの母・祖母の世代と比較した小林(1993)では、女性のほうが世代に関わらず自分の話し方をより強く意識しながら選択しているものの、若い世代の女性の話しことばは、少なくとも文末表現や敬語の使用という面では、いわゆる女性語としての特徴をほとんど持たず、男性のことばに近いものになっていることが明らかとなっている。また同研究における意識調査の結果では、場面や相手に応じてそれにふさわしいことばを使おうとする意識は世代に関わらず強いが、¹⁷「女性であるがゆえの自己規制」を拒否する姿勢が高校生世代は母親より強く、¹⁸「中性的な」自分のことばについて、「その方が言いたいことをはっきり相手に伝えられる」、「男性との話の場で『女ことば』を武器にして得をするという立場をとりたくない」という主張も観察された。また母や祖母たちは、娘たちのことばの実態について、自身の体験として、職場や結婚生活の中で、場や相手に応じた「女らしい」表現を身につけていくのだろうと理解し、「女だから女性語を使うべきだ」という規範意識に縛られてはいないことから、小林は「女性らしく」という規範意識も中年女性も含め希薄になっていると述べている(1993: 187ff.)。

これらの結果は、日本語文化において女性に望ましいとされる言語使用に関する規範が、必ずしも実際の言語使用の実態を表しているとは言えず、実際の女性の言語行動ははるかに多様であることを示すと考えられる。従って本研究においては、職業をもたない若い女性の「女性らしさ」に関する言語規範意識の変容によって、音声上にも影響が表れるのではないかという点について実験を行い考察する。

具体的には、次の仮説を検証する：

1. 社会において性役割をもたない若い日本人女性においても、文化的規範は有効で、従って女性被験者は日本語で話す場合には、「女性らしさ」を投影する高いピッチを用いるが、他の言語(英語、ドイツ語)で話す際には、この文化的規範から解放されるため、ピッチは低くなる。そしてこの傾向は、学習暦の長さに関わらず、被験者にとっての第1外国語である英語でも、また第2外国語であるドイツ語を用いる場合においても同様に観察される。
2. 言語形式における「ことばの中性化」(Okamoto & Sato 1992、小林 1993、Okamoto 1995) が示すように、社会において性役割を持たない若い女性においては

「女性らしさ」に関する言語規範意識の変化が認められ、従ってこの影響は音声上においても観察される。

上記の点について女子大学生25名を対象としてピッチを測定し、統計結果を基に考察を進める。その際、文化的規範となる“femininity” speech style to ‘womanliness’ (Okamoto 2004: 24) に焦点を当てて観察を行うため、同一被験者によって異なる言語で読み上げられた文のピッチを比較分析することとする。¹⁹

2. 調査研究の方法

2.1. 実験参加者

被験者は19歳、20歳の日本人女子大学生25名であり、日本語を母語、第1外国語として英語、第2外国語としてドイツ語を学習している。英語学習暦は全員中学、高校及び大学の計7年であるが、ドイツ語についてはいずれも大学入学時から学習を始め、調査時点においては全員初級学習者である。

2.2. 実験方法

被験者25名には、日本語、英語、ドイツ語各10文²⁰を読んでもらい録音した。その際、事前にこの実験の趣旨が英語およびドイツ語能力を測るものではないことを伝え、できるだけ自然に読んでもらうよう依頼した。発音の採取には、Sony TCM-1390 テープレコーダーと Sony F-PV250 マイクロフォンを使用した。以上の方法により合計 750 サンプルを収集し、それらの音声資料は、ダイテル社の「音声録聞見 for Windows」を用いてピッチ曲線を抽出した。各文における最高値および最低値は大原 (1993) に基づいて、ある文 SI を読んだときに得られた基本周波数において高い順に 3 点を取り、その平均をその文の最高値とし、同様に低い点から順に 3 点を取り、その平均をその文の平均最低値とした。こうして得た各文の最高値、最低値を日本語10文内で平均し、その被験者の日本語における平均最高値、平均最低値とした。英語、ドイツ語の平均最高値、平均最低値も同様である。

3. 結果

被験者25名の日本語、英語、ドイツ語におけるピッチの平均最高値(H)、平均最低値(T)と標準偏差は表1の通りである。

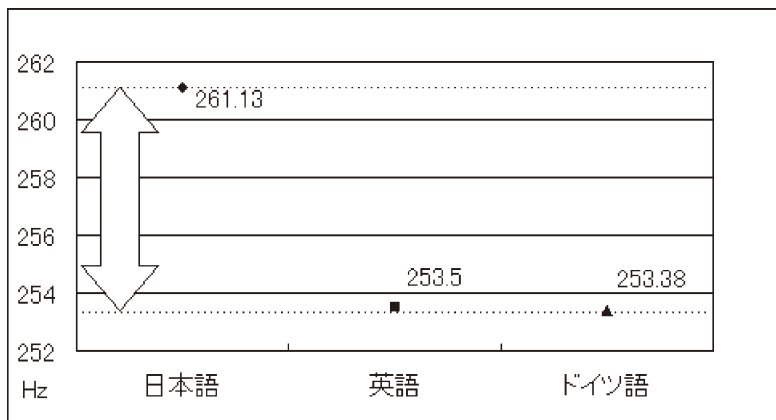
表1 被験者25名のピッチの平均最高値（H）、平均最低値（T）と標準偏差

	日本語		英語		ドイツ語	
	H	T	H	T	H	T
N	25	25	25	25	25	25
Mean	261.13	201.95	253.50	197.53	253.38	198.10
S.D.	24.87	20.21	22.29	19.49	21.39	18.56

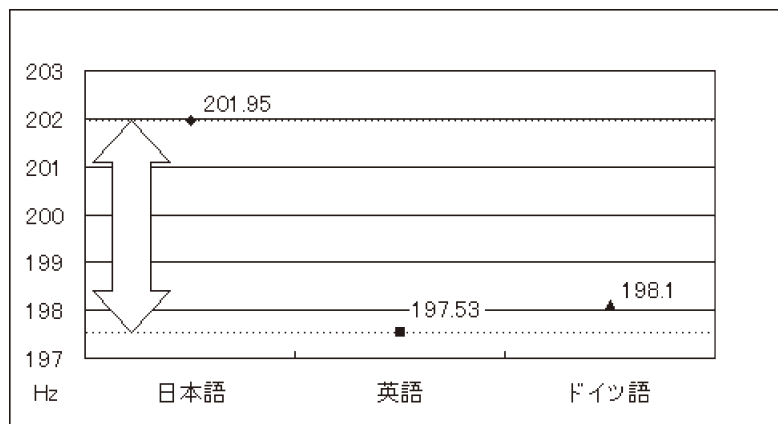
被験者25名によって日本語、英語、ドイツ語で読まれた文について声のピッチを測定した結果、各言語における平均基本周波数は、日本語で 231.54Hz、英語で 225.51Hz、ドイツ語で 225.74Hz であった。また各被験者の平均基本周波数は、25名中19名においては他の言語より日本語で話す際の平均基本周波数の最高値が高かったが、僅差ではあるものの2名においては英語、また4名においてはドイツ語における基本周波数の最高値の方が高かった。全体としては、日本語における平均最高値は英語の平均最高値より 7.63Hz、ドイツ語の平均最高値より 7.75Hz 高かった(グラフ1 参照)。これは大原(1993)における女性被験者6名においては日本語と英語の平均値の差が最高値で 29Hz あり、また最も差が大きかった被験者においては 49Hz もの差があったこと、また Ohara (1999) のインターアクションにおけるバイリンガルの日本人、アメリカ人が日本語を話す際と英語で話す際のピッチ差が日本人で 9～38Hz、アメリカ人で 5～29Hz であった²¹ ことと比較すると、本研究における被験者による日本語と他の言語間における差は小さい。

しかし平均最低値を見ると、本研究においては日本語の場合には英語より 4.42Hz、ドイツ語より 3.85Hz いずれも高く、大原(1993)における平均最低値 5Hz に近い(グラフ2 参照)。

グラフ1 日本語、英語、ドイツ語における平均最高値



グラフ2 日本語、英語、ドイツ語における平均最低値

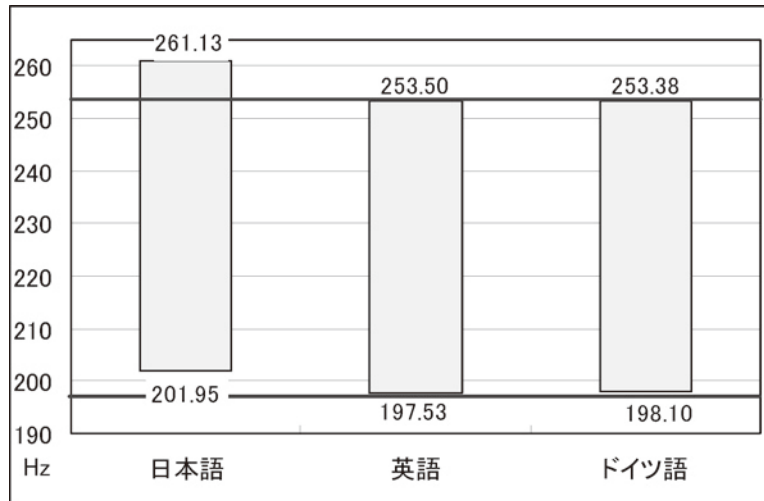


上記のようにして得られた平均最高値、平均最低値について、対応のある要因（日本語、英語、ドイツ語）と対応のある要因（平均最高値、平均最低値）による二元配置の分散分析を行った結果、言語の主効果、ピッチの高低（最高値・最低値）の主効果ともに5%水準で有意であった（ $F_{(1,24)} = 9.83, p < .05$ 、 $F_{(1,24)} = 497.81, p < .05$ ）。一方、交互作用は有意でなかった。多重比較（Bonferroni）の結果、日本語で話す際のピッチが英語及びドイツ語で話す際のピッチよりそれぞれ有意に大きかった（ $MSe = 81.70, p < .05$ ）が、英語とドイツ語間のピッチの差は有意でなかった。

4. 結果に基づく考察

社会において性役割をもたない若い日本人女性においても、*femininity* に基づく文化的規範による影響が声のピッチ変化となって表れるかという点についてであるが、まず本研究における女性被験者の平均基本周波数は、日本語で 231.54Hz、英語で 225.51Hz、ドイツ語で 225.74Hz であり、Yamazawa and Hollien (1992) によって示されている19歳から31歳までの日本人女性60名の平均ピッチ 225Hz とほぼ同じであると言える。すなわち、本研究においても同年齢の American English women による平均ピッチ 214Hz²² と比較すると、若い日本人女性は一般的に声のピッチが高いといえる。そして各言語における平均基本周波数は、日本語の最高値、最低値ともに英語、ドイツ語の最高値、最低値より高く、日本語と他の2言語間においてはいずれも有意な差が観察された。最高値、最低値の差異は、日本語で 59.18Hz、英語で 55.97Hz、ドイツ語で 55.28Hz であり、高低の幅は大原（1993）と比較すると日本語、英語ともかなり

グラフ 3 日本語、英語、ドイツ語における使用ピッチの幅



小さいものの、²³ 日本語を用いる際には、英語、ドイツ語を話す場合と比較してピッチの幅が大きいことは明らかである。

また英語とドイツ語の間における差異は、最高値、最低値ともに非常に小さく、統計的にも有意差が観察されなかった。このように日本語を話す際にのみピッチを上げ、ピッチ幅を大きく用いているということは、被験者にはそれぞれ「声帯の長さ」など身体的要因によって決定されている声の高さがあるが、被験者はその範囲内において他の要因の影響によって声のピッチを無意識に変化させていることを示している。このような女性被験者における言語の違いによるピッチ差は、社会文化的要因から分析する必要がある。²⁴ つまり「日本文化は、女性に対して高い声を優先する」(van Bezooijen 1995) というように、日本では一般的に高い声の使用は“feminine” speech style to ‘womanliness’ (Ohara 2004: 24) と捉えられ、身体的、心理的な “powerlessness” (vanBezooijen 1995)、「かわいらしさ」「柔らかさ」「やさしさ」(大原 1997) などのイメージを与える。このため若い日本人女性被験者は、無意識のうちにこの社会が期待する ‘womanliness’ を実現するために、日本語を用いる際には声のピッチを上げ、ピッチ幅を大きく用いる。²⁵ これは母語として日本語を習得し使用するということが、その言語共同体に共通の文化的知識を習得し、従って言語使用の過程においてその文化的規範の影響を受けていることを示している。

また「女性らしさ」に関する規範意識の変化の影響は、音声上においても観察されるかという点について言えば、本研究における被験者25名中6名においては、英語、ドイ

ッ語に対して日本語で話す際のピッチは必ずしも高くはなかった。これは大原（1993）における女性被験者6名全員において、日本語を用いた際のピッチが英語より高い値を示していたこととは異なる。被験者全員による日本語の平均最高値は、英語の平均最高値より7.63Hz、ドイツ語の平均最高値より7.75Hzと高いものの、この値はやはり大原（1993）における女性被験者の日本語と英語の最高値の平均差が29Hzであったことと比較すると、日本語と他の言語間とのピッチ差は小さい。また英語の平均最高値を比較すると、大原（1993）では252Hz、本研究における被験者では253.50Hzとその差は非常に小さいにも拘わらず、日本語においては、大原（1993）では281Hzであるのに対して本研究では261.13Hzであり、約20Hzも低くなっている。それぞれの言語のピッチ幅も、日本語で59.18Hz、英語で55.97Hz、ドイツ語で55.28Hzと小さい。日本語を話す際の平均最高値が低くなり、英語、ドイツ語との差が小さくなっていること、また最高値・最低値という高低の幅が小さくなっているという観察は、男性被験者において日本語と英語のピッチ差がほとんどなく、また高低の幅も女性と比較すると小さかったという大原（1993）の結果に似ている。つまり本研究における女性被験者においては、日本語を用いる場合と他の言語の場合においてピッチ差が観察され、その差は統計的に有意であることが証明されたが、その一方で男性の声のピッチ変化と同じような傾向が観察された。このことは言語形式だけでなく、音声上の「ことばの中性化」の傾向を示すものと考えられる。

5. まとめと今後の課題

本研究では、若い日本人女性においてジェンダー・イデオロギーの影響が声のピッチの変化となって表れるのかという点について調査を行った。その結果、同一被験者においても、日本語と他の言語との間にピッチ差があることが統計的に証明され、「声のピッチ」が日本社会においてジェンダーを強調する重要な意味を持ち“cultural tools”としての役割を果たしていることが明らかとなった（Ohara 1999: 113ff.）。このことは社会において性役割をもたない若い日本人女性も、言語使用の過程において社会から肯定的な評価を受ける文化的規範の影響を受けていることを示している。

その一方で、その影響の程度は個々に異なっており、被験者の中には影響を受けることを拒否したり、また意識的にその影響を抑えることで独自のジェンダー・アイデンティティーを構築しようとする傾向も観察され、このことはジェンダーがあらかじめ与えられた「属性」ではなく、社会における規範を様々な程度で参考にしながら作り上げられるアイデンティティーの一部であることを示している（中村 2003）。そして同じ言語を話す集団に属する女性においてもその言語行為は多様であり、個人的な経験など様々な

要因も考慮する必要があることを示している。

イントネーションは「女らしさ」、「男らしさ」を示す最も主要な言語表現である (McConnell Ginnet 1978) というように、とりわけ日本社会においてはジェンダーを強調する上で「声の高低」は大きな役割を果たしており、本研究における女性もまた能動的に多様な言語使用を実践しているといえる。「ジェンダーは個人に内在し、継続的に存在する属性ではない」(Bohan 1993: 7) と言われるように、今後本研究における被験者が結婚、就職などを通して人間関係が変化することに伴ってその言語使用にも変化が表れる可能性がある。これらの問題については更なる調査が必要となろう。

註

- ¹ 言語とジェンダー研究においては、社会文化的要因の違いによる言語使用の男女差を説明するモデルとして、男女の力関係、つまり支配・被支配の観点から捉える「支配モデル」(Holms 1992)、男女間に存在する文化の違いから捉える「文化差モデル」(Maltz and Borker 1982)、レイコフ (Lakoff 1975) の主張をモデルとした「劣った言語モデル」の3つのモデルが議論されてきた (中村 2004: 71)。
- ² ここでいうピッチの高さとは、聴覚的に認識される音の高低 (主観的な印象) を指すが、音声学、心理学、医学の分野では、ピッチは音を発するものの基本周波数 (音を発するものの1分間における振動数であるから、人の声について言えば声帯の振動数である) にほぼ比例すると考えられている (Ladefoged 1982, Laver 1994)。
- ³ 声の高低に関しては、身体的構造以外に心理的状态 (Laver and Trudgill 1979, Malmberg 1970)、言語構造の違い (Laver 1994, Yamazawa and Hollien 1992) から分析する研究もある。
- ⁴ 八代京子他 2005: 51f.
- ⁵ 日本人女性 60 名の平均ピッチ 225Hz に対して、18から31歳までの166名の American English women の平均ピッチは 214Hz であった。
- ⁶ 日本人女性 310~450Hz、日本人男性 160~320Hz。
- ⁷ ハワイ大学で日本語を第1言語とする21歳から31歳までの英語に堪能な大学生男女各6名で、男性の平均年齢25.8歳、女性の平均年齢25.7歳。
- ⁸ 「こんにちは」「こんばんは」「さようなら」を、200、250、300Hz と周波数を変えて発話した。
- ⁹ 男性5名、女性14名。
- ¹⁰ ピッチの高さを変えて読み上げられたテキストを日本人とオランダ人大学生各15名に short/tall, weak/strong, dependent/independent, modest/arrogant, attractive/unattractive のスケールに分けて評価させたところ、日本人、オランダ人被験者ともに「低いピッチ」を tall, strong, independent, arrogant、「高いピッチ」を short, weak, dependent, modest と関連させたが、どのようなピッチの声を attractive と評価するかについて、オランダ人はオリジナルな高さの声や低い声のピッチを attractive と評価したのに対し、日本人はむしろ高い声のピッチを attractive と評価した。また理想的な男性、女性の評価については、オランダ人被験者よりも日本人被験者において両者の違いが大きく、日本人被験者は理想的な男性を、オランダ人被験者と比較すると taller, stronger, more independent, more arrogant と評価した。

- ¹¹ Dutch listeners do consider medium and low pitch more attractive than high pitch. No interaction with sex of listener was found. In addition, part of the predicted interaction of pitch with culture speaker was found: Original and low pitches are considered less attractive for Japanese than for Dutch speakers. The two significant interactions seem to reinforce each other: low pitch in women is part of the Dutch culture, high pitch is part of the Japanese culture (1995: 263f.).
- ¹² powerlessness would be cross-species and cross-culturally associated with high pitch, because high pitch reflects small size (cf. The vocalizations of mice and bears, babies and adults) (1995: 254).
- ¹³ All conditions seem to be met therefore to make it plausible that Japanese women raise their pitch, along with employing other linguistic means, in order to conform to sociocultural expectations stressing femininity (1995: 264).
- ¹⁴ Japanese women choose to speak at a higher pitch under the influence of gender ideology that says it is desirable for women to speak in a high voice (2004: 32).
- ¹⁵ 「わ」、「なの」、「かしら」
- ¹⁶ 「ぞ」、「だ」、「だよ」
- ¹⁷ 「相手や場面、場合によって話し方を変えるか」という問いに対して、「意識して変える」「意識しないが変わっている」を合わせると、母親（39歳～52歳）109名は90.8%、女子高校生129名では87.6%を示し、「どんなところを変える（変わる）のか」という問いに対しては、敬語の使い方、話の整え方、言葉の選び方、話のスピード、声の高さが挙げられている（1993: 186）。
- ¹⁸ 「女性らしい話し方」を意識して自己規制することがあるか」という問いに対して、「場合によって自己規制することがある」「あまり意識しないが自然に女性らしくなる」を合わせると、母親は84.4%、女子高校生は73.6%、また「なるべく自己規制しないようにしている」は、母親11.9%に対して女子高校生19.4%と多い。
- ¹⁹ インターアクションにおける声のピッチを測定した研究（Ohara 1999, 2004）においては、対話者の違いに伴って声のピッチに違いが観察されており、従って文化的抑制（culture constraints）については femininity だけでなく、politeness との関連についても考慮する必要性が述べられている。
- ²⁰ 日本語および英語文については、大原（1993）の研究で用いられた英語のイントネーションパターンを示すために使用された文（Ladefoged 1982）を引用し、ドイツ語文に関してはそれらを筆者がドイツ語に訳した（付録1参照）。
- ²¹ Ohara（1999）では、日本語と英語のバイリンガルの日本人とアメリカ人男女各5名ずつを被験者として、対話者の設定を変えて「電話メッセージタスク」を行った。
- ²² Fitch & Holbrook 1970, Hanley & Snidecor 1967, Hollien, Tolhurst, & McGlone 1982, Stoicheff 1981 における American English women の声の平均ピッチ。
- ²³ 大原においては、日本語で99Hz、英語で76Hzであった（1993: 143）。
- ²⁴ For example, in some of my previous research (Ohara 1992, 1997, 1999), I measured the voice pitch levels of bilingual speakers of Japanese and English and discovered that the results of differences across language and gender could best be explained in terms of culture. Finding that the bilingual women produced higher fundamental frequency levels when speaking in Japanese than in English while the bilingual men did not vary their pitch across languages, I suggested that this difference could not be explained in terms of the structures of the languages, physiological difference, or

variances in emotional or health states. Instead, I posited that the results were best understood in terms of sociocultural factors (2004: 224).

- ²⁵ Japanese women choose to speak at a higher pitch under the influence of gender ideology that says it is desirable for women to speak in a high voice (Ohara 1992).

参考文献

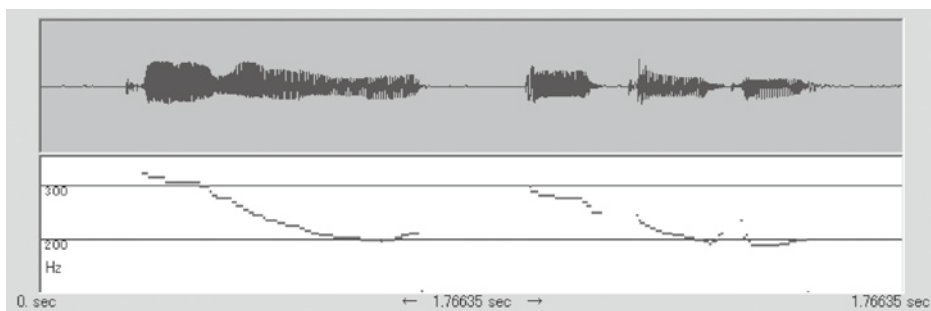
- Bohan, Janis S. (1993): Regarding gender: essentialism, constructionism, and feminist psychology. *Psychology of Women Quarterly* 17. 5–22.
- Fishman, P. (1983): Interaction: the work women do. In *Language, Gender, and Society*. Thorne et al. (eds.) Rowley, Mass.: Newbury House.
- Holmes, J. (1992): *An introduction to sociolinguistics*. London: Longman
- Holmes, J. (1995): *Women, Men and Politeness*. London: Longman.
- 池田理知子 & Eric M. Kramer (2000) : 『異文化コミュニケーション』有斐閣
- 小林美恵子 (1993) 「世代と女性語－若い世代のことばの『中性化』について－」『日本語学』12 (5): 181–192.
- Loveday, L. (1981): Pitch, politeness, and sexual role: An exploratory investigation into the pitch correlate of English and Japanese politeness formulae. *Language and Speech*, 24, 97–107.
- McConnell Ginet, S. (1978): Intonation in a man's world. In: *Signs* 3. 541–559.
- 中村桃子 (2004) 『ことばとジェンダー』勁草書房
- Nichols, Patricia C. (1983): Linguistic options and choices for Black women in the rural South. In Thorne et al. (eds.) *Language, Gender and Society*.
- Ohara, Y. (1992): Gender dependent pitch levels: A comparative study in Japanese and English. In K. Hall, M. Bucholtz, & B. Moonwomon (Eds.), *Locating power. Proceedings of the Second Berkeley Women and Language Conference*, Vol. 2, Berkeley: Berkeley Women and Language Group. 468–477.
- 大原由美子 (1993) 「『女ことば』のピッチ－日英語の比較－」『日本語学』12 (5): 141–147.
- Ohara, Y. (1999): Performing gender through voice pitch: A cross-cultural analysis of Japanese and American English. In U. Pasero and F. Braun (Eds.), *Performing and perceiving gender*, Opladen: Westdeutscher Verlag. 10–116.
- 大原由美子 (1997) 「社会言語学の観点から見た日本人の声の高低」井出祥子 (編) 『女性語の世界』明治書院 42–58.
- Ohara, Y. (2004): Prosody and Gender in Workplace Interaction: Exploring Constraints and Resources in the Use of Japanese. In S. Okamoto and Janet S. Shibamoto Smith (Eds.), *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People*, New York: Oxford University Press. 222–239.
- Okamoto, S. & S. Sato (1992): Less feminine speech among young Japanese females. In Hall et. (eds.) *Locating Power: Proceedings of the Second Berkeley Women and Language Conference*, Berkeley: Berkeley women and Language Group, 478–488.
- Okamoto, S. (1995): “Tasteless” Japanese: less “feminine” speech among young Japanese women.

- In Hall & Bucholtz (eds.) *Gender Articulated: Language and the socially constructed self*, New York: Routledge, 297–325.
- Okamoto, S. (2004): Cultural Ideologies in Japanese Language and Gender Studies: A Theoretical Review. In S. Okamoto and Janet S. Shibamoto Smith (Eds.), *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People*, New York: Oxford University Press. 23–37.
- Poynton, C. (1989): *Language and gender : making the difference*. Oxford University Press.
- Spender, D. (1980): *Man Made Language*. Toutledge & Kegan Paul.
- Terasawa, R., Kakita, Y., & Hirano, M. (1984): Simultaneous measurements of mean air flow rate, fundamental frequency and voice intensity: Results from thirty normal male and thirty female subjects. *Onseigengogaku*, 25, 189–207.
- 鈴木睦 (1997) 「女性語の本質－丁寧さ、発話行為の視点から－」 井出祥子 (編) 『女性語の世界』 明治書院 . 59–73.
- 竹蓋幸生 (1982) 『日本人英語の科学』 研究者出版
- Tsuge, S., Kakami, K., & Fukaya, M. (1987): Speakers' height, weight and voice pitch (1): On correlation of speakers' height, weight, and pitch frequencies of Japanese five vowels. *Bull. Phonet. Jap.*, 185, 2–5.
- van Bezooijen, R. (1995): Sociocultural Aspects of Pitch Differences between Japanese and Dutch Women. In *Language and speech*, 38 (3), 253–265.
- 八代今日子、荒木晶子、樋口容視子、山本志都、コミサロフ喜美 (2005) 『異文化コミュニケーションワークブック』 三修社
- 山内進 (編) (2003) 『言語教育学入門』 大修館書店
- Yamazawa, H. & H. Hollien (1992): Speaking fundamental frequency pattersins of Japanese women. In: *Phonetica* 49. 128–140.
- Zimmerman, D. & West, C. (1975): Sex roles, interruptions and silences in conversation. In Tohrne, B. And Henley, N. (eds.) *Language and Sex*. Rowley, Mass.: Newbury House.

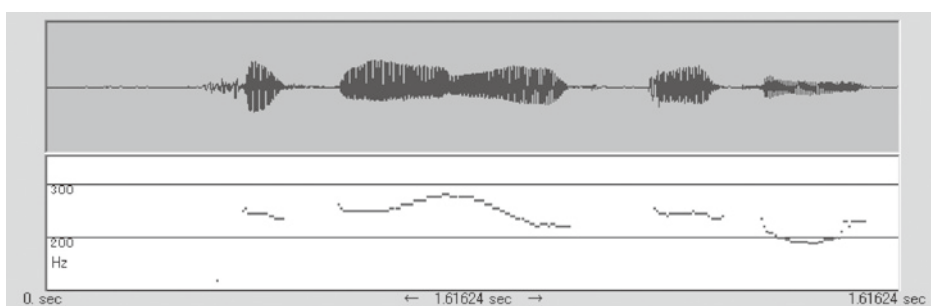
付録 1 実験において朗読に使用した日本文、英語文、ドイツ語文

- 1) 女の子は、お父さんに、お金をあげた。
 - 2) 彼は、ドイツへ行きたかった。
 - 3) 水は、液体ですか。
 - 4) コーヒー、いかがですか。
 - 5) コーヒーにクリーム入れる(?)
 - 6) 新聞を、どこに置いた(?)
 - 7) りんごと、オレンジと、桃をください。
 - 8) 彼の名は、ピーターです。
 - 9) そう思います。
 - 10) お元気ですか。
-
- 1) The girl gave the money to her father.
 - 2) He wanted to go to Germany.
 - 3) Is water a liquid?
 - 4) Do you want some coffee?
 - 5) Do you take cream in your coffee?
 - 6) Where did you put the paper?
 - 7) Give me some apples, oranges, and peaches.
 - 8) His name is Peter.
 - 9) I think so.
 - 10) How are you?
-
- 1) Das Mädchen gab seinem Vater Geld.
 - 2) Er wollte nach Deutschland gehen.
 - 3) Ist Wasser eine Flüssigkeit?
 - 4) Möchten Sie Kaffee?
 - 5) Möchtest du den Kaffee mit Milch?
 - 6) Wohin hast du die Zeitung gelegt?
 - 7) Gib mir Äpfel, Orangen und Pfirsiche!
 - 8) Sein Name ist Peter.
 - 9) Das glaube ich.
 - 10) Wie geht es Ihnen?

付録 2-1 被験者 X における「日本語文 8」のピッチ曲線



付録 2-2 被験者 X における「英語文 8」のピッチ曲線



付録 2-3 被験者 X における「ドイツ語文 8」のピッチ曲線

